

「エシュルン」(「イエシュルーン」) עֲשׂוּרָן の ミドウラーシュ

「エシュルン」(עֲשׂוּרָן)はイスラエルの愛称です。語源となる動詞は「まっすぐである、まっすぐにする」という意味の「ヤーシャル」(יָשַׁר)です。神様に背き続けるイスラエルを神様がエシュルンと呼ばれた真意を知りたいと思いました。

● 「エシュルン」 עֲשׂוּרָן

エシュルンは旧約聖書に4回登場します。一つずつ見ていきます。

(1) 【新改訳 2017】申命記 32 章 15 節

エシュルン (עֲשׂוּרָן) は肥え太った時、足で蹴った。

あなたは肥え太り、頑丈でつややかになり、

自分を造った神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた。

40年の荒野の旅の最後、約束の地を前に語られたモーセの歌の一節です。その少し前、申命記 31 章の最後でモーセは次のように言っています。

【新改訳 2017】申命記 31 章 27、29 節

27 私は、あなたがどれほど逆らうものであるか、うなじを固くするものであるかをよく知っている。見よ。私があなたがたとともに生きている今でさ

え、あなたがたは主に逆らってきた。私の死後は、なおさらであろう。

29 私の死後、あなたがたがきっと墮落して、私あなたがたに命じた道から外れること、また、後の日に、わざわいがあなたがたに降りかかることを私はよく知っているからだ。それは、あなたがたが主の目に悪であることを行い、あなたがたの手のわざによって主の怒りを引き起こすからである。」

モーセの語った通り、イスラエルの歩みは神様に背き続けるものでした。しかし、以下の箇所を見ていくと、「エシュルン」は神様に愛される特別な存在であることがわかります。

(2) 【新改訳 2017】申命記 33 章 5 節

民のかしらたちが イスラエルの部族とともに集まったとき、

主はエシュルン(עֲשׂוּרָן)で王となられた。

メシア王国の預言です。イエシュアはエシュルンの、イスラエルの王として来られます。

(3) 【新改訳 2017】申命記 33 章 26～27 節

26 「エシュルン」(עֲשׂוּרָן)よ、神に並ぶものはほかにない。

神はあなたを助けるために天に乗り、威光のうちに雲に乗られる。

27 いにしえよりの神は、住まう家。下には永遠の御腕がある。

神はあなたの前から敵を追い払い、『根絶やしにせよ』と命じられた。

28 こうしてイスラエルは安らかに住まい、

ヤコブの泉だけが 穀物とぶどう酒の地を満たす。天も露を滴らす。

29 幸いなイスラエルよ、だれがあなたのような、主に救われた民がらうか。

主はあなたを助ける盾、あなたの勝利の剣。

敵はあなたに屈し、あなたは彼らの背を踏みつける。」

「下には永遠の御腕がある」「幸いなイスラエルよ、あなたのような、主に救われた民がらうか」とあります。イスラエルはどんなに背こうとも決して捨てられることのない、神に選ばれ愛される特別な存在であることがわかります。

(4)【新改訳 2017】イザヤ書 44 章 2～5 節

2 あなたを造り、あなたを母の胎内にいるときから形造り、

あなたを助ける主はこう言う。恐れるな。わたしのしもべヤコブ、

わたしの選んだ「エシュルン」(עֲשׂוּרָן)よ。

3 わたしは潤いのない地に水を注ぎ、乾いたところに豊かな水の流れを注ぎ、

わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ。

4 彼らは流れのほとりの柳の木のように、青草の間に芽生える。

5 ある者は『私は主のもの』と言い、ある者はヤコブの名で自分を呼び、

ある者は手に『主のもの』と記して イスラエルの名を名乗る。」

この箇所を私は、牧師の書齋を通して御国の福音に出会うまでずっと、自分を励ます言葉として読んできました。今はここを読むと神様のイスラエルへの切なる思いが迫ってきます。しかも、続く3節、4節にはエシュルンを水と霊によって生き返らせるという終わりの日の約束、また、5節にはイスラエルに接ぎ木される教会への約束も語られているのです。イスラエルを自分に置き換えて聖書を読んでしまう時、神様のご計画が全く見えなくなってしまうことをあらためて思わされました。

申命記7章に神様がイスラエルを選ばれた理由があります。

【新改訳 2017】 申命記 7章 7～8節

7 主があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。

8 しかし、主があなたがたを愛されたから、またあなたがたの父祖たちに誓った誓いを守られたから、主は力強い御手をもってあなたがたを導き出し、奴隷の家から、エジプトの王ファラオの手からあなたを贖い出されたのである。

神様は、イスラエルを愛されたから、またアブラハム、イサク、ヤコブとの誓い

を守るためにイスラエルを選ばれたとあります。「エシュルン」の箇所を見ていくと、父祖たちへの真実をもってイスラエルを選ばれた神様が、終わりの日まで変わることなくその愛と真実を尽くして「エシュルン」の呼称にふさわしくイスラエルを整えてくださることがわかります。

● 「ヤーシャル」 יָשַׁל

「エシュルン」の語源(動詞)は「ヤーシャル」(יָשַׁל)です。「まっすぐである、滑らかである、まっすぐにする、平らにする」などの意味があります。

「ヤーシャル」(יָשַׁל)が聖書で最初に登場するのは民数記です。

【新改訳 2017】民数記 23 章 27 節

バラクはバラムに言った。「では、私はあなたを、もう一つの別の場所へ連れて行きましょう。もしかしたら、それが神の御目にかなって(「ヤーシャル」 יָשַׁל)、あなたは私のために、そこから彼らに呪いをかけることができるかもしれません。」

モーセに率いられたイスラエルの民がモアブの地に宿営した時のことです。モアブの王バラクは神の民イスラエルがそれまで数々の勝利を収めてきたことを聞き、またその民が非常に多いことに怯え、イスラエルに恐怖を覚えたとあり

ます。そこで占い師バラムにイスラエルをのろうように頼みます。バラムは神に祝福された民をのろうことはできないと最初は断りますが、不義の報酬を愛し(Ⅱペテロ 2：15)イスラエルをのろうために出かけていきます。バラクはバラムをイスラエルの見える場所に連れて行き、のろわせようとしますが、バラムは祝福します。それが神様のみこころだったからです。この 27 節はバラムが二度イスラエルを祝福した後、三度目の場所に向かうところです。そして、そこでも、バラクの意に反してバラムはイスラエルを祝福するのです。三度祝福したということは、それが神様の決定的なみこころだからです。

士師記には次のような箇所がありました。

「ヤーシャル」(יָשָׁר)は、「ヴェエーネー」(בְּעֵינַי)(~の目に)と一緒に使われる時、直訳は「~の目にまっすぐ」ですが「気に入る、良いと思う」という意味になります。

【新改訳 2017】士師記 14 章 3 節

父と母は言った。「あなたの身内の娘たちの中に、また、私の民全体の中に、女が一人もいないとでも言うのか。無割礼のペリシテ人から妻を迎えるとは。」サムソンは父に言った。「彼女を私の妻に迎えてください。彼女が気に入った(「ヤーシャル ヴェエーネー」 בְּעֵינַי יָשָׁר)のです。」

ペリシテ人を妻に迎えることはイスラエル人には、ましてナジル人として神にささげられたサムソンには、全くふさわしくありません。しかしサムソンは「気に言った」のです。このあとサムソンはペリシテ人と深く関わるようになりますが、そこには、人間には予想も理解もできない、神様のご計画がありました。エシュルンは「神様の目にはまっすぐ」であり神様の「お気に入り」なのです。神様に背き続けるイスラエルが神様の「お気に入り」であることには神様の深いみこころ、ご計画があるのだと思いました。

次はイザヤ書の箇所を見ます。

【新改訳 2017】イザヤ書 40 章 3～4 節

3 荒野で叫ぶ者の声がある。「主の道を用意せよ。」

荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ(「ヤーシャル」^{יָשָׁר})。

4 すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。

曲がったところはまっすぐに(「レミーショール」^{לְמִישׁוֹר})なり、

険しい地は平らになる。

この箇所はルカの福音書 3 章 4～5 節に引用されています。福音書によれば「荒野で叫ぶ者の声」はバプテスマのヨハネを指します。

イザヤ書 40 章 4 節とルカの福音書 3 章 5 節の「曲がったところをまっすぐに」

と訳されているところはヘブル語では次のようになります。

לְמִישׁוֹרֵי הָעֶקֶב (ヘアーコーヴ レミーショール)

「曲がったところ」と訳された「ヘアーコーヴ」(הָעֶקֶב)の「アーコーヴ」(עֶקֶב)は「でこぼこのある、人をだます、不正な」という意味の形容詞ですが、それに冠詞「へ」(הַ)がついています。そして、同じ語根の「アーケーヴ」(עֶקֶב)は「かかと」という意味で、ヤコブ、すなわちイスラエルの名前の由来となったことばです。冠詞付きの「その曲がった者」はイスラエルを指していることがわかります。

「荒野で叫ぶ者の声」すなわちヨハネが「イスラエルがまっすぐになる」ことを新約時代の最初に宣言しているのです。

「まっすぐに」の「まっすぐ」「ミーショール」(מִישׁוֹרֵי)は「ヤーシャル」(יָשָׁר)の名詞形です。マラキ書には次のようにありました。

マラキ書 2 章はイスラエルの墮落した祭司たちに対するさばきが語られていますが、次の 5～7 節は祭司のあるべき姿が語られています。

【新改訳 2017】マラキ書 2 章 5～7 節

5 わたしの、彼との契約は、いのちと平安であった。

わたしはそれらを彼に与えた。

それは恐れであったので、彼はわたしを恐れ、

わたしの名の前に、おののいた。

6 彼の口には真理のみおしえがあり、彼の唇には不正がなかった。

平和と公平さ（「ミーショール」מִישׁוֹר）のうちに、彼はわたしとともに歩み、多くの者を不義から立ち返らせた。

7 祭司の唇は知識を守り、人々は彼の口からみおしえを求める。

彼が万軍の主の使いだからだ。

ここの「彼」はレビ人を指しています（4節）。しかし、本来イスラエルは祭司として召された民です（出エジプト記19：6）。これはそのままイスラエルのあるべき姿と考えられるのではないかと思いました。

マラキの糾弾から400年、ヨハネが現れた時代のイスラエルは神様がイスラエルに求めた祭司の姿からさらにかげ離れたものになっていました。イエシュアはイスラエルの祭司たち宗教指導者を「悪魔の子」と呼んでいます。善悪の知識の木と一体となり、自分の力ではそこから抜け出すことのできない悪魔の子。

このように、神様からいのちと平安を与えられた祭司であるはずのイスラエルも例外ではなく全人類が悪魔の支配のもとに閉じ込められました。そして、神様に愛されたイスラエルがメシアとして来られたイエシュアを十字架につけて殺

したのです。それが神様のご計画、神様のみこころだったからです。神様は悪魔の策略さえも用いて贖いのみわざを完成させ、新しい創造を成し遂げてくださいました。教会が誕生し、救いが異邦人に及びます。

一方、イスラエルはイエシュアの預言のとおり、A.D.70年にエルサレムがローマによって陥落したことで世界離散し、今もイスラエル迫害の歴史は続いています。なぜなら、イスラエルは神様のご計画の中心だからです。サタンは歴史の初めからイスラエル滅亡を企んでいます。しかし、そんな中、1948年、イスラエルは国家としてエルサレムに戻ってきました。エルサレムに第三神殿が建てられることが神様のご計画にとって必須であり、終わりの日の舞台も、メシア王国の完成も、神様がエルサレムと決定しているからです。今もイスラエルにのちは回復していませんが、終わりの日に神様がイスラエルを復活させます。反キリストによる未曾有の苦しみの中でイスラエルの残りのものに恵みと嘆願の霊が注がれ、自分たちが十字架につけたイエシュアこそメシアだったことを悟り、地上再臨されるイエシュアを迎え、メシア王国が完成します。この時、イスラエルは文字通り「エシュルン」となるのです。

以上のように「エシュルン」、またその動詞「ヤーシャル」を辿っていくと、イスラエルは神様のご計画の基軸であること、神様は常に終わりの日に完成する、

いえ、天ではすでに完成している「まっすぐなイスラエル」すなわち「エシュルン」をご覧になっていることがわかりました。まっすぐとは程遠いイスラエルを「エシュルン」と呼ばれるのは神様がそうされるからです。その大前提にイエシュアの一連の贖いのみわざがあることをあらためて思います。「エシュルン」には神様の一方的なあわれみと神様の真実が証しされ、イエシュアの栄光が表されています。

最後にパウロのことばを見たいと思います。

【新改訳 2017】ローマの信徒への手紙 11 章 30～32 節

30 あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けています。

31 それと同じように、彼らも今は、あなたがたの受けたあわれみのゆえに不従順になっていますが、それは彼ら自身も今やあわれみを受けるためです。

32 神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。

パウロは自分の同胞イスラエルに福音を伝えたいと願い、あらゆる力を尽くしました。しかし、神様の奥義を知らされます。それは神様の特別な存在であるイスラエルが頑なになったのは教会が救われるための神様のみこころであり、イ

イスラエルにはこの先に救いのご計画があるということです。

すべての人が不従順の中に閉じ込められたのはすべての人があわれまれるためとあります。それはすべての人が十字架の死と復活に与ることです。

それは、イエスの名によって、

天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、

すべての舌が 「イエス・キリストは主です」と告白して

父なる神に栄光を帰するためです(ピリピ 2 : 10~11)。

この奥義を知らされたパウロの感嘆のことばを聞いて「エシュルン」のミドゥラーシュを終えたいと思います。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 11 章 33、36 節

33 ああ、神の知恵と知識の富は何と深いことでしょうか。神のさばきは何と知り尽くしがたく、神の道は何と極めがたいことでしょうか。

36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン

【ミドゥラーシュを終えて】

神様の愛するイスラエルを不従順に閉じ込めてまで、イスラエルに接ぎ木し、イ

イスラエルよりも先に救いの恵みに与らせてくださった教会に、神様が期待されていることは、あらためて大きいと思いました。イスラエルを基軸とする神様のご計画を正しく理解し、神様が常に見ておられるその完成を待ち望み、見張っていることこそ教会の大切な役割であると思います。

あきらめかけていたミドゥラーシュでしたが、今回はなんとか最後までたどり着くことができました。主が祈りに答えてその都度導きを与えてくださり、ヘブル語の不思議さを味わわせていただけたことを、主と銘形先生に心から感謝いたします。

主の御名を心からほめたたえます。

木曜アシュレークラス

村上京子

